



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「漢字認知研究」は「漢字学習支援」といかに連携しうるか
Author(s)	小林, 由子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 7, 69-77
Issue Date	2003-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45638
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC007_005.pdf



「漢字認知研究」は「漢字学習支援」と いかに連携しうるか¹⁾

小 林 由 子

[abstract]: “How to Teach Kanji” is both an old and a new issue in the field of teaching Japanese. On the other hand, “How Kanji are Processed” has been studied in cognitive science. While such cognitive studies are applicable to kanji teaching, cooperation between cognitive studies and kanji teaching is not yet sufficient. In this paper, “Kanji Teaching” is reframed as “Support for Kanji Learning”, and the aims of the paper are: 1) to introduce cognitive studies of kanji processing of non-Japanese native speakers in educational psychology, 2) to point out problems connoted in the term “Kanji Teaching”, and 3) to discuss how cognitive study of kanji processing can be applied to “Support for Kanji Learning”. “Kanji Teaching” gives rise to confusion between teaching kanji to Japanese native speakers and Japanese non-native speakers because the purpose of teaching is implicit. Kanji cognitive studies in educational psychology can contribute to clarifying the purpose, syllabus design and activity design of “Support for Kanji Learning”.

1. はじめに

「漢字教育」は日本語教育において古くから取り上げられてきた課題の一つである。1998年には「平成10年度日本語教育学会秋季大会」において漢字教育についてのシンポジウムが開催されるなど²⁾、教育方法の模索は現在も続けられている。加納(1999)は、近年の漢字教育研究の動向を、「高頻度語彙・必須漢字語彙の計量調査研究」、「情報処理モデルや認知科学的な実験などによる研究」、「学習者の意識調査・学習ストラテジーの研究」の3つに分類し、日本語教育におけるそれぞれの重要性を指摘している。しかし、「情報処理モデルや認知科学的な実験などによる研究」については、日本語学習者を対象とした漢字認知研究がいくつか見られるようになって

きたものの、それほど活発とはいえない。

そこで、本稿では、主に教育心理学の分野における非日本語母語話者を対象とした漢字認知研究を概観し、それらの知見がいかに日本語教育に適用できるか、および効果的に適用するためにはどうすべきかについて検討・考察する。

2. 「漢字教育」の現状

「認知研究」の日本語教育への適用を考える際には、現状を把握することが必要である。そこで、まず、日本語教育における「漢字教育」の現状について概観する。

現在発行されている漢字教材は、「主教材に準拠し、主教材の語彙に含まれる漢字を学習するもの」(『日本語初歩漢字練習帳』凡人社など)、頻度順にシラバスを構成し熟語として漢字を学習させるもの(『Kanji in Context』ジャパントゥタイムスなど)、漢字を覚える際に必要な知識によりシラバスを構成したもの(『Basic Kanji Book』凡人社など)、単漢字の意味・読みを覚えるもの(『漢字はむずかしくない』アルクなど)に大別される。その内容は、字義・読み方・熟語例などの説明のみのもの、説明に例文が加わったもの、さらに練習問題を含むもの、などばらつきがあるが(小林 1998)、それらのばらつきは、学習上の必然性から生まれたとはいいい切れない。また、練習問題は、漢字にふりがなをつける「読み練習」と読み方から漢字を再生する「書き練習」が主で、その他の練習を含む教材は少ない(小林 1998)。くわえて、漢字圏・非漢字圏に対象者を絞っている教材はあまりない。

さらに、教授者へのインタビューを見ると、日本語母語話者に対する「国語教育」をモデルとして漢字教育を行っている者が少なくなく(小林 印刷中)、加納(1999)が指摘した「高頻度語彙・必須漢字語彙の計量調査研究」、「情報処理モデルや認知科学的な実験などによる研究」、「学習者の意識調査・学習ストラテジーの研究」が十分に反映されているとはいいたい。

したがって、「認知研究」の成果は、現状ではそれほど日本語教育には反映されていないといえる。

3. 非日本語母語話者を対象とした漢字認知研究

では、「漢字認知研究」の分野ではどのような研究が行われているのだろうか。

認知心理学の分野においては漢字認知の研究が数多く行われているが、非日本語母語話者の「日本語の漢字」³⁾の認知を対象とした研究はそれほど多くはない。しかし、近年、主に教育心理学の分野で日本語教育への応用を視野に入れた非日本語母語話者を対象とした研究が見られるようになってきた。本章では、対象者の異なる4つの先行研究を概観する。各先行研究の分類を表1に示す。

表1 本稿で取り上げる漢字認知研究

対 象 者	漢 字 圏	非 漢 字 圏
日本語学習経験あり	邱 (2002)	和田・伊藤 (1999) 邱 (2002)
日本語学習経験なし	小林・Lau (2003)	桑原 (2002)

それぞれの研究の概要は以下の通りである。

1) 和田・伊藤 (1999)

和田・伊藤 (1999) は、非漢字圏の初級～上級の日本語学習者を対象とし、自由放出法により漢字記憶表象の特性について検討を行った。その結果、以下のような知見が得られた。

- 初級者では形態手がかりが意味手がかりより多く用いられるが、漢字能力の向上につれ意味手がかりが用いられるようになる
- 日本語母語話者・非母語話者とも「非文字」より「文字」が、「非部品」より「部品 (部首・音符など)」が検索において優位に用いられる。しかし、非母語話者の場合「部品」が記憶単位の中で特定の配置関係を伴っているわけではない

2) 桑原 (2000)

桑原 (2000) は、漢字学習経験のない非漢字圏日本語学習者を対象に、漢字とその英語翻訳語の対連合学習をさせることによって、イメージ媒介方略の有効性を検討した。得られた知見は以下の通りである。

- イメージ媒介方略群の方が単純リハーサル群より記憶成績がよい
- 形態イメージ性の高い漢字の方が低い漢字より記憶成績がよい
- 試行回数が低い場合には「はね・はらい」など小さい単位で、類似する漢字同士の混同が見られる
- 形態イメージ性の低い漢字にはイメージ生成より絵画提示が有効
- 部首などの構成要素の形態はイメージによって符号化される可能性がある

3) 邱 (2002)

邱 (2002) は、意味判断課題を用いて、同音異義語と形態類似性の干渉の有無から、日本語母語話者と日本語学習者（韓国人学習者・上級非漢字圏学習者）の処理経路を検討した。その結果、以下のような知見が得られた。

- 日本語母語話者は、漢字熟語を処理する際、音韻媒介アクセスと形態情報からのアクセスの両方を用い、漢字類似性の有無によっていずれかのアクセスが優位になる
- 韓国人学習者（漢字圏学習者）は、形態情報から意味アクセスを行っている
- 上級非漢字圏学習者は、漢字熟語の意味を判断するとき音韻媒介アクセスを行っている
- 韓国人学習者の漢字知識は、日本語の漢字熟語における形態と意味の学習に優位にはたらくが、形態と日本語の音韻の連結を阻害する可能性があるため、形態と音韻の連結を強化する練習が必要
- 非漢字圏学習者の場合は、日本語漢字の学習がある程度進んでから、漢字熟語の形態と意味を連結を強化することが必要

4) 小林・Lau (2003)

小林・Lau (2003) は漢字圏（香港）の「非」日本語学習者を対象に「日本語にしかない漢字熟語」に対する意味判断を多肢選択で行わせ、以下のような知見を得た。

- 平均正答率は31.3%
- 以下のような回答傾向が見られた

①漢字に意味がない全くの当て字を中国語として意味判断する

- 例：「味方」を「料理の作り方」と判断する（55%）
- ②中国語に同義語がないものを中国語の異体字として判断する
- 例：「硝子」を「哨子（当番）」と判断する（32.5%）
- ③語構成が異なるものを中国語として意味判断する
- 例：「生意気」を「生意」＋「気」として判断し「八つ当たり」とする（42.5%）
- ④中国語に同義語があるものを中国語として意味判断する
- 例：「火車」を「電車」とする（82.5%）
- ⑤中国語に同義語があるものを日本語として意味判断する
- 例：「非難」を「遭難」とする（45%）
- ⑥中国語に同義語がないものを日本語として意味判断する
- 例：「手本」を「手作り」とする（67.5%）
- ・語構成が異なるものは中国語として判断されやすいのではないか
 - ・中国語に漢字語が「中国語」か「日本語」かを判断するメタ知識があるのではないか

4. 「漢字認知研究」は日本語教育にどのような示唆をもたらすか

では、前章で取り上げた「漢字認知研究」は、日本語教育にいかに関与されようだろうか。

(1) シラバス設計・学習設計への示唆

まず、非漢字圏学習者に対しては、以下のような示唆が得られる。

- 1) 初級者は形態手がかりを使うが能力向上につれ意味的手がかりを使うようになる（伊藤・和田 1999、邱 2002）
- 2) 初級者に対しては漢字の「部品」について注意喚起が必要（伊藤・和田 1999）
- 3) 入門段階ではイメージ媒介が有効。特に、イメージ性が低いものについてはイメージ提供が有効（桑原 2000）
- 4) 部首などの構成要素がイメージによって符号化される可能性がある（桑原 2000）
- 5) 上級非漢字圏学習者は、漢字熟語の意味を判断するとき音韻媒介アクセスを行っている（邱 2002）

すなわち、非漢字圏日本語学習者が日本語を学ぶ際には、初期段階では

漢字の形態を認識することを重視したほうがよい。その際、漢字の「部品」への注意喚起が必要であり、方法としてはイメージ媒介が有効である。特にイメージ性が低い漢字については、絵などでイメージを提供することが効果がある。学習が進むにしたがって、形の認識から、意味の認識に内容を変えていくことも必要である。さらに、上級学習者の場合は、語彙の音から意味を判断するようなアプローチが有効であろう。

一方、漢字圏学習者については、以下のような示唆が得られる。

- 1) 漢字知識は形態と意味の学習に優位に働くが、形態と音韻の連結強化が必要 (邱 2002)
- 2) 「語構成」「当て字」「同型異義語」など「母語にはない日本語独自の漢字語」について「メタ知識」の明示が必要 (小林・Lau 2003)

すなわち、漢字圏学習者は、すでに漢字の形態・意味についての知識を持っているが、日本語の音韻に関する知識を補う必要がある。また、音韻的知識だけでなく、「日本語の漢字語」についての「メタ知識」の提供と、それらの知識を使用可能にするための訓練が必要になる。その際には、初級段階では日本語の語彙知識そのものが乏しいため、学習者の学習段階や日本語について持っている知識・使える知識を考慮し、認知的負荷が過剰にならないための配慮が必要となろう。

以上の点から、漢字認知研究は、漢字圏学習者・非漢字圏学習者に対する「漢字学習シラバス」「漢字学習活動」の設計に有用な指針をもたらすといえる。

(2) 漢字学習の前提の明確化

また、「漢字認知研究」は、日本語教育に存在する「暗黙の前提」を明確にすることにも貢献しうる。

すでに母語として日本語を習得しており語彙的・文法的知識を持っている母語話者と、日本語についての既有知識がない非母語話者では、学習の基礎となる知識が異なるため必然的に異なる学習プロセスをとると考えられる。しかし、「2『漢字教育』の現状」で指摘したように、「漢字教育」を行う日本語教師は「国語教育における漢字教育」を学習のモデルとしてしばしば採用する。このことは、「漢字学習」は母語話者・非母語話者とも同様に行われるという暗黙の前提があることを暗示する。

一方、「漢字教育」の解説書では、授業での留意点についての経験的な

指摘はあるが、「漢字教育の目的」について明示的に書かれていることはあまりなく、「漢字は勉強すべきもの」という暗黙の前提に基づいて、記述がされていることが多い(石田 1980など)。

これらの暗黙の前提は、「暗黙」であるがために、すべての教師が同じ前提を共有しているとは断言できず、また、その根拠も明示されてないため、教師によって異なる可能性がある。小林(1998)では、教師によって授業方法に違いがあることを指摘しているが、このばらつきは、「漢字学習に関する暗黙の前提の違い」が生み出している可能性がある。2章で指摘した教材内容のばらつきについても同様である。

「漢字認知研究」は、非日本語母語話者の漢字認知について実証的なデータをもたらす。このデータは、従来「暗黙」であった学習者の既有知識の違いや学習すべきこと、学習の際に必要なことを明らかにするであろう。

(3) 「漢字学習支援」への適用

「漢字認知研究」は、日本語教育に対して有用な知見をもたらすが、日本語教育で漢字を扱う際には、さらに考慮すべき事柄もある。

そのひとつは、漢字の自律学習への視点である。

本稿では、あえて「漢字教育」と「漢字学習」という二種類の用語を使用している。「漢字教育」についての教師へのインタビューでは、しばしば「時間がない」ことが問題点として挙げられ、時間がない場合には、漢字の読み・意味・熟語・例文などの基礎知識を提示し学習者の自助努力にまかせるという方略がとられることが多い(小林 印刷中)。「漢字教育」には「基礎知識を提供する」というニュアンスがある。

しかし、実際には学習者の自助努力には個人差があり、自助努力にまかせることは漢字の習得を保証しない。特に、日本語圏で漢字の知識を使わなければならない学習者は、教室だけではなく生活環境の中で漢字を自ら学んでいく必要がある。学習者が漢字を習得するためには、基礎知識の提供にとどまらない、漢字知識の使用や自律学習を含めた「漢字学習」の支援が日本語教育の責務であろう。「漢字教育」は「漢字学習支援」として考えられるべきである。

「漢字学習支援」には、「何が自分にとって必要か」「自分が得意なこと・不得意なこと」を自覚し「自分が弱点を克服しゴールに達するためのプランの認識・立案・実行・修正」ができるという学習者のメタ認知的知識・

技能への支援が不可欠である（小林 2002）。たとえば、「自分は漢字圏出身だから漢字がわかる」と認識している学習者は、実際には語構成など日本語の漢字語についての知識すなわち「漢字のメタ知識」が欠落していても自覚できないために、日本語の漢字語が学習できない可能性がある。そのような場合には、問題点の自覚やゴール設定を外部から援助する必要がある。

「漢字認知研究」から得られる、学習に必要な「漢字のメタ知識」に関する知見は、「問題点の同定」や「ゴール設定」に有効であろう。

5. おわりに

以上、「漢字認知研究」の日本語教育への適用可能性について述べてきた。「漢字認知研究」は、「漢字学習支援」の「シラバス・学習活動の設計」、「学習の前提の明確化」、「自律学習における『メタ知識』の明示」に適用しうる。

適用のためには、さらなる「漢字認知研究」、「漢字学習支援研究」が求められるが、くわえて、認知科学と日本語教育の分野間の連携および「漢字学習支援者」の「認知科学的知見」に関する研鑽が不可欠であろう。

注)

- 1) 本稿は平成12-14年度科学研究費補助金（基盤研究C）「日本語学習における漢字学習活動の研究」（研究代表者：小林由子）の成果の一部である
- 2) 日本語教育学会『平成10年日本語教育学会秋季大会予稿集』を参照のこと
- 3) 漢字圏非日本語母語話者は、漢字の処理の際、音・訓の読み分けなど母語と日本語で異なる知識を使うと考えられるため、母語の漢字処理と日本語の漢字処理を分けて考える必要がある

参考文献：

- 邱學瑾（2002）「漢字圏・非漢字圏学習者における漢字熟語の処理過程」『教育心理学研究』第50巻 pp.412-420
- 石田敏子（1989）「漢字の指導法（非漢字系）」『日本語の文字・表記（下）』（講座日本語と日本語教育第9巻）明治書院 pp.290-312

- 伊藤寛子・和田裕一 (1999) 「外国人の漢字の記憶検索における手がかり
ー自由放出法を用いた検討ー」『教育心理学研究』第47巻、pp.346-353
- 加納千恵子 (1996) 「非漢字圏学習者の漢字力の発達過程を評価する試み」
『日本語教育方法研究会誌』第3巻第1号、日本語教育方法研究会
pp.24-25
- 加納千恵子 (1999) 「漢字教育の動向」『月刊言語』Vol.28 No.4 pp.70-76、
大修館書店
- 小林由子 (1998) 「漢字授業における学習活動：認知心理学的モデルによ
る検討」『北海道大学留学生センター紀要』第2号、pp.88-102
- 小林由子 (2001) 「認知心理学的視点」青木直子ほか (編) 『日本語教育学
を学ぶ人のために』世界思想社、pp.56-71
- 小林由子 (2002) 「漢字学習・教育におけるメタ認知研究の役割」『日本語
教育方法研究会研究報告』Vol.9 No.2、日本語教育方法研究会、
pp.14-15
- 小林由子・Lau Pui Ki (2003) 「香港人は日本語の漢字熟語をどのように
誤解するか」第6回国際日本研究・日本語教育シンポジウム (於 香
港城市大学) 配付資料
- 小林由子 (印刷中) 『日本語学習における漢字学習活動の研究』、平成12-14
年度科学研究費補助金成果報告書
- 桑原陽子 (2000) 「非漢字圏日本語学習者の漢字学習におけるイメージ媒
介の有効性ー漢字と英語単語の対連合学習課題による検討ー」『教育
心理学研究』第48巻、pp.389-399

こばやし よしこ (留学生センター助教授)